

【 復活のトロパリ 第8調 】

めぐみふかきしゅよ、なんぢはたかきより
恵深主 爾 高

くだり、みっかのほうむりをうけて、
降 三日 葬 受

われらをくるしみよりときたまえり、
我等 苦 釋 給

わがいのちとふくかつなるしゅよ、こう
我 生 命 復 活 主 光

えいはなんぢにきす。
榮 爾 歸 ず。

【 日本の亜使徒ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
使徒等 同座者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
實 神智 役者 聖

なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい
神 撰 笛 愛

にみちたるうつわ、わがくにのこう
満 器 我 國 光

しよおしゃ、あしとしゅきょうせいニコライ
照 者 亜使徒主教 聖

よ、なんぢのぼくぐんのため、および
爾 羊 群 爲 及

ぜんせかいのた めに 、 いのちを たも う せい
 全 世 界 為 生 命 賜 聖

さんしゃに いのり たま え 。
 三 者 祈 給

【 日本の亜使徒ニコライのコンダク 第4調 】

こ う え い は ち ち と こ お と せ い しん に き
 光 榮 父 子 お と 聖 神 歸

す 、

せ い せ い しゃ あ し と せ い ニ コ ラ イ よ 、 わ が
 成 聖 者 亞 使 徒 聖 我

く に なんぢ を た び び と お よ び い ほ う じん と う け
 國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受

し に 、 なんぢ は は じ め わ が く に に お い て お の
 爾 初 我 國 於 己

れ を が い ら い しゃ と し り た れ ど も 、 ハ リ ス ト ス の
 外 來 者 知

ひ か り と あ た た か き を な が し 、 なんぢ の て
 光 暖 流 爾 敵

き を ぞ く しん の こ と な あ し 、 か れ ら に か
 屬 神 子 為 彼 等 神

み の おんちようを あ た え 、 ハ リ ス ト ス の きょうか い を た て
 恩 寵 與 教 會 建

た り 、 い ま こ の き ょ う か い の た め に い の り
 今 此 教 會 為 祈

た ま あ え 、 け だ し わ れ ら そ の し ょ し は な ん
 給 蓋 我 等 其 諸 子 爾

ち に よ ぶ 、 わ が よ き ぼ く し ゃ よ 、 よ ろ こ
 呼 我 善 牧 者 慶

べ よ 。

【 復活のコンダク 第8調 】

い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
 今 何 時 世 世

だ い じ ん じ な る し ゅ よ 、 な ん ち は は か よ り ふ く
 大 仁 慈 主 爾 墓 復

か つ し て 、 し せ し も の を お こ し 、 ア
 活 死 者 興

だ ん を ふ く か つ せ し め た ま え り 。 エ ヴ ア は な ん
 復 活 給 え り 爾

ち の ふ く か つ を た の し み 、 せ か い の は て
 復 活 樂 世 界 極

は な ん ち が し よ り お き た る を い わ う 。
 爾 死 興 祝

司祭) (黙誦: 聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と

なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
 に、



【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 じょうせいのもものよ、われらをあわれめ
 常 生 者 我 等 憐
 よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 なるじょうせいのもものよ、われらをあわれ
 常 生 者 我 等 憐
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 聖 神 聖 勇 毅

せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。
 聖常生者の我等を憐れめよ。
 こうえいはちちとことせいしん
 光榮は父と子と聖神
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 歸今何時世世に、アミン。
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれめよ。
 聖常生者の我等を憐れめよ。
 せいなるかみ、せいなるゆう
 聖神聖勇
 き、せいなるじょうせいのものよ、われらを
 毅聖常生者の我等を
 あわれめよ。
 憐れめよ。

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

【 プロキメン 提綱 主日第8調 】

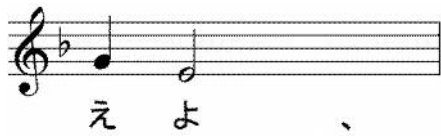
司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

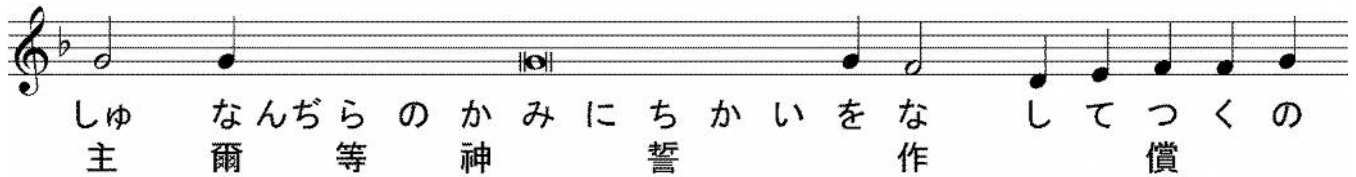
誦經) プロキメン、主爾等の神に誓を作して償えよ、

しゅなんぢらのかみにちかいをなしてつくの
 主爾等神誓を作償

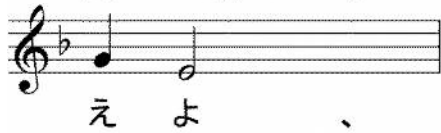


え よ 、

誦經) 神はイウデヤに知られ、其名はイズライリに 大なり、



しゅ なんぢら の かみにちかいをなしてつくの
主 爾 等 神 誓 作 償



え よ 、

誦經) 主 爾 等の神に



ちかいをなしてつくのえよ、
誓 作 償

【 アポストロス 使徒經 224 端 エフェス書 4 章 1 節～6 節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パヴェルがエフェス人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄弟よ、我、主の爲に 囚たる者は、爾等に求む、爾等が召されたる召に稱い

て行え、凡の謙遜と溫柔と恒忍とを以て、愛に因りて互に恕せよ、務めて和平

の繋を以て、神の一なるを守れ。體は一、神は一、爾等が召されたる召の望の一

なるが如し、主は一、信は一、洗禮は一、神萬衆の父は一なり、彼は萬有の上に

在り、萬有を貫き、我等萬人の中に在り。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。主にある囚人であるわたしは、あなたがたに勧める。あなたがたが召されたその召しにふさわしく歩き、できる限り謙虚で、かつ柔和であり、寛容を示し、愛をもって互に忍びあい、平和のきずなで結ばれて、聖霊による一致を守り続けるように努めなさい。からだは一つ、御霊も一つである。あなたがたが召されたのは、一つの望みを目ざして召されたのと同様である。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ。すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのものの内にいます、すべてのものの父なる神は一つである。

【 アリルイヤ 主日第8調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、

アリル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、

ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{きた しゅ うた かみわ すくい かため よ} 來りて主に歌い、神我が救の防固に呼ばん、

アリル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、

ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{さんよう もつ そのかんばせ まえ すす うた もつ かれ よ} 讃揚を以て其顔の前に進み、歌を以て彼に呼ばん、

アリル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、

ア リ ル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いきぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主 宰よ、我が心に神を知る智慧の 浄き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる 誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ} 畏るる 畏をも入れて、我等が 悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ
を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん
爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書53端 10章25～37節 】

司祭) えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん
睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) でん せいふくいんけい よみ
ルカ傳の聖福音經の讀、



司祭) つつし き か ときひとり りつぼうし つ かれ ころ い し われ
謹みて聴くべし、彼の時一の律法師イイススに就きて、彼を試みて曰えり、師よ、我

なに な えいえん いのち つ かれ これ い りつぼう なに する なんぢいか よ
何を爲して永遠の生命を嗣がんか。彼は之に謂えり、律法に何をか録せる、爾如何に読

むか。こた い なんぢころ つく たましい つく ちから つく おもい つく しゅなんぢ
むか。答えて曰えり、爾心を盡し、靈を盡し、力を盡し、意を盡して、主爾

かみ あい またなんぢ となり あい おのれ ごと これ い なんぢ
の神を愛せよ、又爾の鄰を愛すること、己の如くせよ。イイスス之に謂えり、爾の

こた ところただ これ な すなわちい しか かれ おのれ ぎ ほつ
答えし所正し、之を爲せ、乃生きん。然れども彼は己を義とせんと欲して、イイス

スに謂えり、わ となり だれ こと い あるひと
スに謂えり、我が鄰とは誰ぞや。イイスス答えて曰えり、或人イエルサリムよりイエリホン

くだ とき ぬすびと あ かれらそのころも は かれ きず ほん し
に下る時、盜賊に遇へり、彼等其衣を剥ぎ、彼に傷つけ、幾ど死するばかりにして、

かれ す さ たまたまひとり しいさいこ みち くだ かれ み す さ おな
彼を捨て去れり。適一の司祭是の路より下りしが、彼を見て、過ぎ去れり。同じくレ

かしく いた ちか かれ み す さ ただある じん ゆ ここ いた
ヴィトも彼処に至り、近づきて彼を見て、過ぎ去れり。惟或サマリヤ人は行きて、此に至り、

かれ み あわれ つ そのきず あぶら さけ そそ これ つつ かれ おのれ かちく の
彼を見て憫み、就きて、其傷に油と酒とを沃ぎて、之を裏み、彼を己の家畜に乗せ、

りよかん ひ いた かれ かんご あくるひゆ とき ぎんにまい いた あるじ あた
旅館に引き至りて、彼を看護せり。明日行かんとする時、銀二枚を出し、館主に與え

これ い こ ひと かんご ついえも これ ま われかえ ときなんぢ つくの こ
て、之に謂えり、此の人を看護せよ、費若し之より益さば、我返る時爾に償わん。此

さんじん うち なんぢいづれ ぬすびと あ もの となり おも かれい こ ひと あわれみ
の三人のうち、爾孰を盗賊に遇いし者の鄰と意うか。彼曰えり、此の人に矜恤を

ほどこ もの くれ い ゆ なんぢ か ごと おこな
施しし者なり。イエス彼に謂えり、往きて、爾も是くの如く行え。

(比較用 口語訳) ある律法学者が現れ、イエスを試みようとして言った、「先生、何をしたら永遠の生命が受けられましょうか」。彼に言われた、「律法にはなんと書いてあるか。あなたはどうか読むか」。彼は答えて言った、「『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。また、『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』とあります」。彼に言われた、「あなたの答は正しい。そのとおりに行いなさい。そうすれば、いのちが得られる」。すると彼は自分の立場を弁護しようと思って、イエスに言った、「では、わたしの隣り人とはだれのことですか」。イエスが答えて言われた、「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、強盗どもが彼を襲い、その着物をはぎ取り、傷を負わせ、半殺しにしたまま、逃げ去った。するとたまたま、ひとりの祭司がその道を下ってきたが、この人を見ると、向こう側を歩いて行った。同様に、レビ人もこの場所にさしかかってきたが、彼を見ると向こう側を歩いて行った。ところが、あるサマリア人が旅をしてこの人のところを通りかかり、彼を見て気の毒に思い、近寄ってきてその傷にオリーブ油とぶどう酒とを注いでほしいをしてやり、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。翌日、デナリ二つを取り出して宿屋の主人に手渡し、『この人を見てやってください。費用がよけいにかかったら、帰りがけに、わたしが支払います』と言った。この三人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣り人になったと思うか」。彼が言った、「その人に慈悲深い行いをした人です」。そこでイエスは言われた、「あなたも行って同じようにしなさい」。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮
はなんぢにきす。
爾 歸

※聖体礼儀③ (金口イオアン聖体礼儀) へ